

『若者が「社会的弱者」に転落する』

宮本 みち子（千葉大学教授）

ご紹介いただいた宮本でございます。

静岡で労働を専門にする研究所の講演に呼んでいただくというのは、大変光栄でありかつ恐いことだと思っていますが、貴重な時間をいただいておりますことを嬉しく思っています。

今、原田先生から高校の生の現場のことがご紹介ありました。それから柴崎先生からきわめて的確に私の本の身に余るご紹介がありましたから、後はいただいた1時間でうまく要点をつかんでお話できればいいのですが、もし足りない場合は質問の時間もあるようなので、するどい質問をいただくということで補っていければと思っています。

1. 若者が直面するもの ～「大人への長い移行期」に潜む問題～

過去10年間の若者現象として日本を考えると、非常に大きな転換が90年代の終わり頃に起こったと思うわけです。私がこの本を出したときに、旧知である日経新聞の論説主幹にこの本を贈りました。それから数日後に日経新聞に結構大きくその人が記事を書いていました。何と書いてあるか。「この本を読むまで恥ずかしながら自分自身が若者の問題に関しては完全にパラサイトバッシングの立場だった。朝、出勤の時にパチンコ店の前で開店前に地べたに座り込んでいるのは、中高年失業者より若い人の方が多い。その姿を見て毎日まいましく感じ、日本はダメになると思っていた。この本を読んで長年新聞の世界にいながら実は若者に対する認識は非常に遅れていた事を反省している。」という記事を書かれているわけです。

今年の2月に厚生労働省のキャリアガイダンス施策担当の方が3人千葉大学に訪ねて来られて、若年者雇用に関する委員会を立ち上げるというお話を伺いました。その方が言うには、労働問題専門でやってきた役人だが、若年者雇用問題は全然扱ってこなかった。離転職が多くなっているのは80年代から言われていた。社会が豊かになり時代が進むと、勤めていても気に入らなければ辞めるという傾向は強くなる。先進国共通の現象でその一環だろうと思ってきた。特に平和で世界的に見ても豊かな日本で離転職が若者の中で増えてくるのは、これは若者自身の問題だという認識だった。雇用市場の問題として考えた事はなかった。それが、今年の2月頃、いよいよ本格的に深刻な事態だとなって、かなり上の方から若年者雇用問題をこのまま放置できない、とにかく抜本的な対策を直ちにやれと言われた、というわけです。しかし、蓄積がないので色々と力を貸してくれというわけです。

先進諸国の中で若年者問題に関して日本は、かなり特殊な性格を持っている国だと思います。私は10年前にこういう問題の検討を始めました。1991年頃にある所が調査費を出してくれるというので、これはいいチャンスだと思いました。その時やってみたいテーマがありました。それは若者に関し学校現場では過度な受験競争、子供たちの心の問題が出てきていたわけです。一方、学校教育現場から分断されて言われていたのが、「独身貴族」だったわけです。学校教育現場とはどういう関わりがあるのか議論されずに独身貴族現象があって、つまり晩婚化が80年代にすすんでいました。

独身者の男女がたくさんいる。そして独身者が非常にリッチな生活をしている。80年代～90年代に雇用問題はなかったわけですから、彼等は正規雇用であった。自分で給料を貰っているのだけど、日本の初任給や若い人の給料はそんなに高くない。それにも関わらず彼等は豊かである。そういう独身貴族論だったわけです。

私の91年の素朴な疑問は自分でお金を稼いでいないのに、あるいは稼いでいる以上になぜリッチであり得るのか？ これは極めて常識的な問題意識だったかもしれませんが。当時、日本の社会現象としては若者は豊かだと言いながらも、何が豊かかについて掘り下げた問題意識は全くなくて、とにかく若い人は豊かで我々の時代とは違うという半分皮肉や非難を込めて言っていたわけです。この事は検討してみる余地のあることでした。

調査費を貰いまして、東京と長野県で20歳代の未婚者を調査しました。調査の中心は親子関係でした。つまり親子の間でどういう同意があって、若い人たちが豊かなのか。つまり親の豊かさが子供たちにいく構造なのですが、その構造が親子の関係の何から出てきているのか。自分としてはこれはかなり重要な関心事でしたが、これが社会的にどういう意味を持つのかとか、社会の中でこの調査結果がどのように受け入れられるのか、それとも無視されるのかというのは全く予想できない事でした。

最初に感心を持ったのはマスコミでした。何に感心を持ったのか。私たちの調査の重要な一つは、未婚者の7割が親と同居しているという現象でした。この7割が高いのか低いのか、当時は分かりませんでした。とにかく結婚しない独身者は半分以上親の家にいる。給料はほとんど自分で使っていた。家に1~3万円入れる。(これは10年経っても最近まで変わっていません。去年、一昨年と10年後の調査をしています。) お金を入れるというのは、シンボルとしてのお金を入れるという事で親はこのお金を子どもの名前で貯金しているという現象だったわけです。家庭の中では息子や娘は親掛かり、母親掛かりで身の回りの世話はほとんど母親にやってもらうという状況なわけです。

マスコミにとっては面白いテーマでした。つまり日本のリッチな若者現象だという事でさかんに記事にしたわけです。その決定的な駄目押しは1999年に共同研究者の東京学芸大学の山田昌弘さんが『パラサイト・シングルの時代』という新書を出しました。独身貴族という表現で言われていたものをよりその性格を明らかにしました。パラサイトというのは英語で寄生虫ですね。親に寄生している若者たち。今日の日本の若い大人たちの特徴は、親への寄生だとしたわけです。この新書は8万部以上売れて大ブームになりました。その後、新聞社や雑誌社が繰り返し特集を組みました。それに対する読者の反応も高かったです。

私も共同で調査をやってきて、世論がパラサイト・バッシングへとどんどん進んでいく事に非常に複雑な思いがしています。その事に警鐘を鳴らすのが、一つの問題意識でこの本を書きました。今や『パラサイト・シングルの時代』と『若者が「社会的弱者」に転落する』を読み比べて論評しようと言われたりしています。

90年の前半に私たちが調査したのはバブル経済の最後の状況でした。20歳代の未婚者の職業や収入についても調査しました。彼等が正規雇用なのか非正規雇用なのかを区別して聞く項目はありましたが、当時は聞く意味もないくらい普通に正規雇用が常識でした。去年の調査では、正規雇用は半減しています。

日本は独身者が多く、晩婚化がすすんでいる。そしてその7割が親の家にいて、彼等の生活の水準は非常に高い。この事がどういう意味を持っているのか中々分からないわけです。それは日本の社会にいと分からないです。日本では社会慣行ができ上がって、高度成長の工業化の時代に作り始められたライフスタイルが色々な制度に裏打ちをされて作られ、90年代の晩婚化の中である完成した形を作ってきたことが、やっと後になって分かってきたわけです。

その時に出会ったのがイギリスの研究でした。『若者はなぜ大人になれないのか』という文献を翻訳しましたが、最初それを読んだとき、私はハッと思いました。何を一番問題にしているかというと、「大人への長い移行期」問題だったのです。イギリスの社

会の中で若者たちが大人になるというプロセスが過去20年に渡って大きな変貌を遂げている。その事が前提にあります。学校教育期間も長くなっている。学校教育期間を終えて最終的に一人前と認定される状態に達して、そしてフルのシチズンシップを持った状態に到達するのに極めて長いジグザグな期間が出現しているという指摘でした。そのジグザグな移行期の中で若者の中のある部分が重大なリスクに直面しているという指摘でした。青年期から成人期へ達するまでの移行期の問題です。人生の前半の時期は基本的に親に依存しなければ生きていけない。親に依存し、保護されながら大人になるためのプロセスを歩むわけです。そのプロセスを歩んで最終的には親から自立、そして社会の構成メンバーとして完全な市民権を得た状態になっていく。これは依存の状態から自立の状態への移行だととらえているわけです。

日本で自立という言葉は過去20年、結構使い古された言葉になっています。日本で自立問題を言う時には、ほとんど精神的自立問題としてです。つまりいつまでも子供っぽいか精神的に他に依存している若者がどんどん増えている。いかに精神的に自立させるかと言うのが主要なテーマでした。イギリスの文献を見ますと、精神的自立なんていう生ぬるい問題は全然問題にしていない。彼等が自分自身の足で立ち、食べていけるようになる、ここに今日のイギリスの国の中でどのような問題を抱えているかという事だったのです。眼の醒めるような枠組みだったわけです。日本では今まで考えたこともない若者をとらえるための枠組みだったわけです。

今、20代の未婚者は非常に多い。30代前半で男性の4割が未婚です。女性の3割弱が未婚状態。30代後半でも男性の2割以上が未婚状態です。

1989年に最初に若者に関して大きな問題として提起されたのが「1.57ショック」という出生率の急激な低下問題でした。1.57という数字は、その時の新聞のトップに報道されたくらい低い数字でした。厚生労働省の人口問題研究所が1.57という数字を出した時に、短期的な錯乱要因があってこの数字になったのではないかと、翌年には回復するのではないかとさえ言われました。ところが翌年、1.53になったわけです。私たちの90年代の調査結果は、最初に何のために使われたかと言うと、こうした急激な出生率低下とその担い手である若者世代を理解するために、いつまでも結婚しないで親の家にいる、ヌクヌクとしている若い人たちという説明に好まれて使われました。その時には、若者の雇用については問題になりませんでした。

後で分かりましたが、イギリスだけでなくヨーロッパの全ての国で若者の移行期問題が最大の関心事になっていた。ヨーロッパで移行期問題が言われていた時に、日本では全く問題にならなくて、最大の問題は、結婚しないという事に尽きていました。

2. 若者の危機が隠蔽されやすい社会

過去10年間のジグザグな日本社会の議論をみますと、欧米と違い日本社会の独特な構造があることがわかります。その構造が若者の危機を隠蔽しやすい社会にしています。日経新聞の論説委員ですら、つい今年の年頭まで若者たたきをやっていた。では、どうして日本社会では若者の危機が隠蔽されやすいのか？ これを考えますと日本の社会構造全体の特徴が見えてきます。

数年前に10ヶ月程イギリスに居て、イギリスの青年政策について見てきました。その2年前にも一度行っています。その時のイギリスは景気が悪くて、工業地帯へ行くと廃屋のような工場が並び、ガラスが割られたりしていました。街の中に若者のホームレスがたくさんいるわけです。ホームレスで一番問題だったのが、16歳と17歳の若者たちでした。18歳になるとイギリスでは成人年齢に達しますので社会保障、その他が大人の扱いになります。その前の16歳、17歳というのは、一応義務教育を終了して、

イギリスは日本より中学卒業して辞めてしまう人が多いですが、フルの大人にならない。でも仕事がない、住む家がないという人たちが路上に出てくる。日本でホームレスといえば、中高年者なのに、イギリスでは何故ティーンエイジャーなんだろう？ 私は最初分かりませんでした。

ここに象徴されますが、欧米諸国の若者の危機は分かりやすいのです。何故かという、自立促進型の社会です。子供は何歳まで親の家にいるかと聞くと、大抵は18歳と答えるわけです。18歳で親の家から出られなくなっている状況も強まっていますが、その割合は日本と比べものにならないくらい少ない。日本は20歳代で独身者の7割が親元で暮らしていますが、西欧諸国では2割くらいです。18歳になったら親の責任は終わる。そして独立していくべきだと子供に教えるし、そういう価値観を前提にした社会制度体系を作ってきました。たとえば大学教育費用です。18歳になればみんな労働市場に出て働いた時代だったら、18歳になれば大人です。「親の家から出て一人立ちすべきだ」で良かった。でも、5割の人が18歳を越えて教育を受ける時代になった時代では教育費の負担をどうするかという問題は、親子の关系到影響する問題です。ヨーロッパの福祉国家路線をとってきたほとんどの国では、国立大学の授業料はタダでした。だから働こうが、大学進学しようが18歳になったら親の家を出て、大学生はキャンパス内の寮で生活する。生活費については、親が出せなければ奨学金を貰うとか貸し付けを利用するという状態でした。

メリットとデメリットがあると思います。

自立促進型の欧米諸国では、若い人たちの自立が尊重されますから自立がしやすいし、制度がきちんと作られています。しかし、もう一方ではいつまでも日本みたいに保護はしない。20歳代後半になってフリーターをやっている、特に日本の女性の場合によくあると思いますが、「結婚するまで家にいればいいよ、そんなにアクセク働かなくてもいいよ、残業やっても残業代の出ないような会社なんか辞めればいいよ」と家においてくれる。こんな日本のような社会と、自立せよという事で親が貧しければ放り出すという国との違いです。

もう一つの問題として、過去20年に渡って先進諸国では家族の変容がすすんで離婚が一般化したわけです。

一方では、高学歴社会になり高い教育を受けないと仕事に就けない。一方では、福祉国家路線が変わってきてタダだった授業料が有料になる。奨学金が貸付制度になる。じゃ親が長い教育期間を保護してくれるかという保護しない、できない親たちが出てくる。一番大きな問題は、ティーンエイジャーでまだ仕事に就けない、外に出ても住める家がないと言う時に親の家にいられない、親と喧嘩してホームレスになるというケースです。

極端な例をあげましたが、文化の違いが若者の問題を違う形で出現させることが分かります。

3．ポスト青年期の出現と移行期の問題

昨年、ヨーロッパで若者に関する国際会議がいくつか開かれました。3つの会議に出してみました。EU諸国が若者の問題に関して一国を超えて国際的に共同して検討作業をするという試みがすすみました。私が出たのはスペイン、イギリス、イタリアの会議でした。EUの本部と色んなところの助成金で会議が行なわれています。3年前くらいから共同プロジェクトで検討が行なわれているのです。一国の壁を超えてEU諸国として青年政策を検討するという状況です。

「EUと言ったって10数ヶ国の若者の問題はきわめて違う。まとめて論じられな

い」と言われてはいますが、あえて類型化しています。一つは、西および北ヨーロッパグループです。ここは基本的に福祉型国家です。福祉国家のレベルに大きな違いがありますが、文化的には自立促進的文化を持っているという点で共通しています。それに対して東ヨーロッパは旧社会主義国ですので、独特の形があります。もう一つは、南ヨーロッパです。ここは若年者の失業率が30%と非常に高い。学校を卒業しても30歳くらいまで、まともな仕事に就けない。未婚のままみんな親の家にいる。みんなパラサイトなのです。日本以上にきわめて晩婚化です。イタリアとかスペインの出生率は1.20くらいで世界最低です。

若い人は、仕事が不安定で親の家を出られない。親たちは、文化的には日本に似ていて、子供を結婚まで家におくというのがごく普通の社会感覚です。でも、日本みたいに小遣いをあげたり、面倒を見たりはしません。ですから子供たちの悩みもあるようです。とはいえ、イタリアやスペインではホームレスになりません。親たちが保護するからです。しかし、こういう国は子供を産みません。イタリアは人口減少国に転じていますが、やがて日本はイタリアを追い抜いて世界最低になると言われています。つまり若い人たちの家族主義と若い人たちの自立を誰がやるかという問題で日本と南ヨーロッパは似ています。基本的に家族です。では、家族とは誰か？ 親です。親が子供に対する責任を負う。それに較べて公的な責任は非常に弱い。そういう国では、若い人の危機が見えにくいのです。

日本において、バブル経済が終わって、90年代後半までは中高年者の失業問題が目立つようになり議論されたのに、若い人に関してはこの2年前まで全く対象から外されていきました。もっぱら議論されたのは、出生率低下問題でした。私は若者に関して色々言ってきましたが、解釈に使われたのは「なぜ、彼等は結婚しないのか。」「なぜ、親の家を出ないのか。」「なぜ、子供を産まないのか。」という事に終始していました。

1985年に経済企画庁がレポートを出しています。そのレポートは「2000年の時点で団塊の世代と団塊2世の世代が深刻な雇用問題に直面するだろう。」と予測しています。団塊の世代、つまり人口の最も膨らんでいる世代として、2000年には役職に就けない人たちが膨大な数に昇るだろう。そして子供たちが学校を出るときには、仕事に就けない時代になるだろう。つまり時代の転換期が確実に来るだろうと予測していました。

ところがこの報告書が忘れ去られる状況になりました。その直後にバブル景気に突入したのです。それによって雇用問題より労働力不足の問題になりました。私は千葉県に住んでいますが、千葉でも深刻な若年者の雇用問題が来るであろうという事でこの時期に一度議論されました。かなりの調査費を使って若年者の雇用に関する調査をしました。ところがその報告書が出た直後に景気が良くなって、その報告書はお蔵入りになってしまいました。一昨年、その調査のまとめをした担当者が、その報告者がどこかにあるはずだと県庁内を捜したが出てこない。残っているのは自宅にあったものだけという状態でした。

85年に論じられた若年者雇用問題は、その後パラサイト・シングル問題になり、「労働意欲なく、社会的意識なく、リッチな消費生活に邁進している若者たち」と、「登校拒否、さまざまな心の問題、元気のない子供たち」の問題、教育上の問題という議論になってしまいました。

80～90年代にかけてどういう事が起こったのでしょうか？ 共通した認識にヨーロッパの国は到達しています。6年ほど前、私がイギリスの研究をきっかけに関心を持ち始めた頃には、ヨーロッパでも若者の問題に取り組む枠組みは完成していませんで

した。少数の研究者が青年期から成人期の長い移行期問題がポスト工業化時代における若者問題だと、さまざまな理論的検討を行なっていました。

昨年の会議に出席してみて、枠組みが完成していると感じました。この会議は研究者と若者に関する様々な実践家、行政担当者、この3者が一堂に会する構成になっています。かなり意識的に若者問題を扱う人々が手を携えるべきだという事でやっています。

こういう表現をしています。「工業化の時代に定式化された大人になる道筋は、ある標準的な形が作られた。」雇用だけでなくトータルにです。人生の前半3分の1は、学校教育期です。学校教育期にある子供は、完全に大人たちに保護される。親が子供を保護の対象にし、学校の制度の中に（最近はこの表現をしてもいいと思います）長期にわたって囲い込む。そして囲い込む時期が終わったら、ただちに労働市場へ出ていく。とりわけ男性のライフコースは、学校からストレートな労働市場への移行となるわけです。労働市場へ出たということを通して社会人になる。だから学生とか生徒というステータスと社会人になるというステータスとの2つの、完全な2分割です。

学校を出て社会人になるという事は、大人になるルールが敷かれたわけですから、その当人がどのように考えようが、どのような状況だろうがそのまま自動的に大人という世界に入っていく。こういう仕組みが工業化の時代に完成したと考えられる。

もう一つ重要な事は、学校から労働市場へ出る。そして数年後には自分で家庭を持つ。これによって大人の条件が完成する。これで完全に親から独立する。そして自分自身の生活の根拠地を作り、経済的に自活する。福祉国家の場合は、大人というところに福祉国家の市民、国民としての権利と義務がカバーされる。つまり学校が終わり社会に出るということは、雇用と国家の公的制度の網の中に入ることを意味したという事です。

ところがそういう状況が変わってきました。いつごろからでしょうか？ 私は1970年代の終わり頃だと思います。オイルショック後の産業構造の転換の中で、製造業中心の時代からサービスや情報化の時代へと入る。同時に多くの国が国家財政の困難を抱えて、福祉国家の諸制度の見直しを計る。この頃から若者が大人になってくるプロセスに大きな変化が始まりました。

4. 若者の諸相

一方では、最終的な学校が終わる年齢が遅くなってくる。もちろん恵まれた高学歴層とそうでない階層があります。20歳を超えて学校を終わらない人たちがたくさん出てくる。それと同時に学校を卒業した後の労働市場が、最近の日本でもハッキリしてきましたが、キッパリとある形で労働市場のあるポジションへ入るという状況ではなくなっている。そして労働市場をあちこち移行的なプロセスをたどって、そしてある段階で一人前になっていく。これを向こうではヨーヨー型と名付けています。オモチャのヨーヨーのように若者が大人への時期を過ごしている。ヨーヨー型とは、あるプラスの面で言うなら、従来のがんじがらめの道筋の中に乗せられて外れる事ができなかった事と比べると自由度が増し、選択肢が広がっています。

もう一方では、ヨーヨー型とはあっちへ行ったり、こっちへ来たり、大人になるためのきちんとしたステップアップの道筋がなくなっているということです。このヨーヨー型移行のリスクな部分は、押しなべて若者の中に出てくるわけではなく、構造的な様相を呈するわけです。

一番リスクのある人たちは、どういう人たちか？ 先程のホームレスの人たちです。イギリスでは、一時ホームレスは10万人を超えていました。今は少し減っています。去年の国際会議では、日本の無業者という言葉に当たるとはいますが、Neet (not in employment, education and training, 雇用もない、学校にもいない、職業訓練プログ

ラムも受けていない)という表現を使っています。雇用、学校、職業訓練この3つのどこにもいない若者たち。これを Neet 問題と呼んでいます。その人たちがイギリスで16万人。Neet に近い人たちが、イギリスの若者の2割だと言っています。その2割が更新して増えていくわけです。ヨーロッパ全域で Neet 状態にある人たちは、数百万人になると言われています。問題は下の階層の若者が、だんだん社会の底辺に沈殿して入れ替わらなくなっている事です。こういう状態は、社会全般的に見ても非常に不安定な問題を抱えるわけです。

一つの問題は、当然雇用の問題です。注意しなければならないのは、日本で最近若年者の雇用問題が言われると「景気が悪いからだ。」と景気問題に還元する傾向が強いですね。それは間違いだと思います。つまり景気が良くなると若干改善されると思いますが、この80年代以降の若年者の移行問題は単に景気の問題じゃなくて、社会の構造そのものの問題です。一人前になるために非常に長い期間が一方でかかり、一方で非熟練の労働市場がなくなり、高い教育水準が必要になります。では、教育責任を誰が果すのか？ 先進国は、どんどん受益者負担型に変わってきています。日本のように完璧な受益者負担型社会と、ヨーロッパ型のまだまだ福祉国家型の制度が残っている国や、北アメリカ大陸の国とはタイプは違いますが、大多数の人たちが高校を卒業しても何らかの教育を受けることが一般化しています。

誰が費用負担するのかという事を考えますと、まず費用負担をできない人たちから不利世代が出てきます。

80～90年代に先進国は高学歴化社会を作ってきた。高学歴化すると同時にもう一方では、高校中退者が急増する事になったわけです。たとえば1980年代にカナダでは、高校生の半分がドロップアウトしました。一方でカナダは、80年代の高学歴化で半分の人が大学まで進学する状態です。みんな大学へ行く時代に、一方で高校を中退するという不思議な現象がありました。

日本労働研究機構のプロジェクトで、「進路多様校」(最もフリーターが多く、仕事の困難なレベルの高校)の卒業生の聞き取り調査をやっています。東京の大田区にある進路多様校で、いわゆるランクが一番下の高校です。

その先生が長年自分の教え子の卒業生を追跡していて、こう言っています。「日本で言うところの Neet 問題の対象となるような人たちがどういう状態にあるか。こういう高校は入学した時からアルバイトをしている。つまり高校入学した時から労働者である。」彼等は10～20万円、多い人で30万円稼ぐ。稼いだお金は、全部自分の消費に回る。親は生活に困っているから、小遣いはくれない。子供にとって東京ならアルバイトは、いくらでもある。高校時代から彼等は立派な生活者であり、立派な消費者であって、ブランド物をたくさん持っている。成績で評価できない彼等にとってお金を稼ぎ、自分の消費欲求を満たせることは、彼等の誇りになっているという状況がある。

つまり高校全入社会のある一面というのは、高校生でありながらかつ労働者であり、フリーターであるということです。

それと同時に高校を中退する人たちもたくさんいます。

中退せずに卒業証書を買った彼等は、その後どうなるか？ 10年前なら正規雇用に使っていた。ところが今では正規雇用には就けない。日本労働研究機構の調査は、高卒で進学しない人たちの中で、親の階層によってフリーターや無業者になる人たちと、正規雇用になる人たちに分かれる階層分化が起こったのはいつ頃かを分析しています。結論は18、19歳の人で親の社会階層によって進路が分かれたのが、1990年代の末です。90年代の終わりに、親の社会階層によって子供の運命が変わっていく傾向がハッ

キリと出てきたというわけです。

高校時代からたくさんアルバイトをやっていた高校生が、フリーターになってどういう状況になっているでしょう？ 東京のようにアルバイトがある所では高校在学中もアルバイトをやり、卒業してからもやる。聞き取り調査の一つの特徴は、彼等の職業観はある一つの固定した職業観を持たない事です。卒業してスーパーに勤めたが、色々問題があって辞めた。次ぎに運転手になったが数ヶ月やって辞めた。その23歳の男性に「今、やりたいもの何？」と聞いたら「僕は、保父さんやってみたい。」と言うわけです。「保父さんって面白そうだし、市の広報に載っていた。」「応募したの？」「う～ん。まだ。」「条件はどうか、調べたの？」「いや、調べてない。」「でも、何となく給料が悪そうだから、どうかなって思って～」こう言う会話が延々と続いていくわけです。つまり高校時代からずっとアルバイト、フリーターであり、自分の親たちも、周囲の人、地域全体も、職業観を確立していない。言ってみればフリーター社会なわけです。そういう人たちはかつてはそれでもあるプロセスを経て何とか食べていたのですが、今の状況では、彼等の先はかなりはっきり見えています。彼等が30歳になった時、どうなるだろう？ 今、当面仕事があり、親の家にいるので、自分で稼いだお金は多少親に入れたとしても、残りは全部自分の消費に回すことができる。そう言う状況の中で、彼等は問題に気付かないというわけです。

一方、山形県の進路多様校の調査では、同じフリーター志向でも違いが明確です。山形県と東京では、フリーターとしての選択肢が全く違います。トラックの運転手をやっている22歳の元進路多様校生は、朝6時～夜11時まで配達しているのに、その給料は15万円です。日本全国で見た場合に、かなり地域差があるわけです。

若い人の必ずしも貧困とは言えない現象があって、そして何よりも独身の時代は親の家にいて、現金を得さえすれば自分の消費に回すこともできる。実は20歳～30歳のはじめくらいまで（年齢幅は分かりませんが、若い世代が共通に抱えている構造的リスク）工業化時代に確立した大人になるための制度が、ポスト工業化になり、大人になるために長期の時間を要するようになり、彼等の意識としても早いうちに身を固めて一人前になる事を良しとしなくなってきた。言ってみれば、贅沢な社会の中で大きくなってきた若者にとって、これまでの社会制度というのはそぐわない。今まで若者の自立を保障してきたのが家族と会社ですが、その家族と会社によって大人になる事ができなくなっている。じゃ家族と会社に代わって、彼らにとってヨーヨー型であろうと、ある段階になったら何とか自分で食べていけるようになるためにどういう支援制度があるのか。今の日本の制度には、それが無いという問題だと思います。

時間がなくなってしまって「今、何が必要か」に入ることができませんでした。質問の中で、この点について、まとめとして話をできればと思っています。